

ネット 漂流

狙われた子どもたち

Vol.71

ネット時代の ゆらぐ金銭感覚



NET情報技術推進ネットワーク株式会社
篠原嘉一（しのはら・かいち）

コロナ禍の影響もあり、非接触での支払いなどがもてはやされているが、現金を使ってきた世代には考えたこともないことが起きている。

ここ数年、電子マネーやカード払いが一般化してきたが、子どもまでPayPayや電子マネーを使い出した。買い物に行っても親がまとめて払ってくれたり、電子マネーで支払いをしたり、Amazonアプリをクリックすると自宅まで届く……電車に乗れば自動精算で電車代をいくら使ったかを意識しない。大人でも「おつり」を受け取るという行為がかなり少なくなってきた。小学生の多くは、おつりの体験そのものがない児童がいる。

保育園の講座に出向いたときお買い物ごっこで先生がカードを差し込むと「ワオン！」と先生が大きな声を出していた。先生からすると「いま時」を体験させたいのだろうが、金銭感覚を身につけさせるためにも現金の受け渡しをイメージさせてもらいたかった。

テレビを見る機会も少なくなった子どもたちは、お金やアイテムが簡単に手に入るような話をネット動画で見ている。「クレクレキッ

ズ」という言葉を聞かれたことがあるだろうか。ゲームやSNSの中で、お金を使ってプレイしていそうな人にアイテムをおねだりする子どもたちのことを指す言葉だ。誰彼なしに要求する児童もいる。そう、児童であって中学生ではない。幼い子どもがネットの相手から有料アイテムをもらうことでゲームを楽しんでいる。本来、ゲームではソフトウェアを購入してプレイする。特にニンテンドー等のゲーム機は無料ゲームではない。ゲームを進めていくうちにアイテムを購入して（課金）、より楽しくプレイを進めるのが本来の姿だと思うのだが、有料アイテムを友達やゲーム上で見つけた人（通りすがりのようなイメージ）におねだりをするのだ。金額にすると数千円分になる。これは恐喝や脅迫になりかねないのだが、お金そのものの価値を考えたこともなく、悪いことだとイメージできていない子どもが多い。ときには500円玉を持たせておやつを自分で買いに出かける経験をさせておかなければ、親のカードで数十万円使うゲームになるかもしれない。

子どもの「クレクレキッズ」も問題だが、ネットで使うお金に関しては大人も感覚が麻痺してはいないだろうか。最近のニュースでは、どこかのスポーツ協会の50代理事が、協会のお金2500万円超をスパチャに投げ銭していた。「スパチャ」とはネット上でライブ配信をしている人にネット上で寄付する行為だが、健康ランドで役者さんにおひねりを渡している人をイメージしてもらえば分かりやすいかもしれない。手元に現金で2500万円置いてあれば、そうそう全額を渡すこともないと思うが、現金化せず、口座からネット口座へ振り替えてしまうと大金だとイメージできないのかもしれない。町から誤送金された4000万円をネットカジノに注ぎ込んだ男性も同じだろう。銀行やカード会社なら送金上限額があるが、ネット上のコインに置き換えるといくらでも送金できてしまう。

高齢者のネットトラブルも、このスパチャになりつつある。あらゆる世代がスマホに移行し、銀行口座を登録してネットバンクを使いこなせるようになってきた。ネットバンクからは宝くじも買える。結果も教えてくれる。やがてライブ配信をしているお気に入りの人を見つけると、スパチャで投げ銭をし始める。ライブ配信をしている人気の女性は、1時間で100万円近く売り上げる。その何割かがアプリ会社の取り分になる。素人でも芸能活動ができ、芸能事務所でもないのにタレント業のように人でお金を稼ぐことができる。この仕組みに高齢者がターゲットとなっていく。一人暮らしでも、ライブの相手は自分の話に答えてくれるのだから、一方通行のテレビとは楽しさが違った。一方通行のテレビとは楽しさが違った。

ネットの時代だからこそ、金銭感覚を身につけたい。